

各部部長及び
若手アカデミー報告資料

第一部報告
第187回総会
2023年4月17日、18日

第一部役員
部長：橋本伸也
副部長：溝端佐登史
幹事：日比谷潤子
幹事：吉田 文

第一部の組織
分野別委員会（10）・分科会（79）

分野別委員会	分科会数
言語・文学委員会	4
哲学委員会	5
心理学・教育学委員会	13
社会学委員会	9
史学委員会	10
地域研究委員会	9
法学委員会	9
政治学委員会	5
経済学委員会	6
経営学委員会	5
第一部直接統括	4

第一部の運営体制

- 部会：年3回を予定
- 役員打ち合わせ：随時
- 拡大役員会：部会の中に1-2回、必要に応じて開催（部役員+分野別委員長）
- 第一部が直接統括する分科会
 - ①国際協力分科会
 - ②人文・社会科学の役割とその振興に関する分科会
 - ③人文・社会科学基礎データ分科会
 - ④総合ジェンダー分科会

第25期の方針（第二回部会 [2021年4月21-22日] で確認）

- ① 会員任命問題の解決をめざして四役、幹事会、第二部、第三部との強固な連携のもとで粘り強い働きかけを継続します。
- ② 改正科学技術・イノベーション基本法、第6期基本計画のもとでの人文・社会科学の振興策についての審議・具体化を進めます。
- ③ 「日本学術会議のより良い役割発揮」をめぐる議論について、部の特性を生かしながら積極的に参画します。
- ④ 部における分野別委員会・分科会体制及び科学的助言活動のあり方についての検討を進めます。

2022年12月総会以降の活動（骨子）

- ▶ 会員任命問題への取り組み：部役員が幹事会等において必要な取り組みに参画、当事者への対応
- ▶ 「意思の表出」に関わる部及び分野別委員会による査読等の実行、今後の課題の抽出へ
- ▶ 多彩なシンポジウム等の開催（2023年1-3月に公開シンポジウム8件）

公開シンポジウム等（2023年1-3月分）

- ▶ 1/7 公開シンポジウム「婚姻平等の射程」（法学委員会社会と教育におけるLGBTIの権利保障分科会）
- ▶ 1/19 公開講演会「ジェンダー法視点に基づく議会改革」（政治学委員会比較政治分科会）
- ▶ 1/28 公開シンポジウム「ダイバーシティ推進と日本社会の＜不平等＞」（社会学委員会）
- ▶ 2/23 公開シンポジウム「子ども政策の総合化を考えるⅡ 乳幼児の学びの保障：幼児教育と小学校教育の接続の観点から」（心理学・教育学委員会乳幼児発達・保育分科会）

公開シンポジウム等（2023年1-3月分）

- ▶3/4 公開シンポジウム「地方におけるデジタル・ガバナンスー政治・行政・民主主義のアップデートに向けて」（政治学委員会政治過程分科会）
- ▶3/11 公開シンポジウム「これからの教育政策のゆくえーCSTI教育・人材育成ワーキンググループ「政策パッケージ」をめぐってー」（心理学・教育学委員会高大接続を考える分科会）
 - CSTI有識者議員が指定討論者として登壇
- ▶3/17 公開シンポジウム「18歳と司法への市民参加」（法学委員会「市民性」涵養のための法学教育システム構築分科会）
 - 高校生がパネルディスカッションに登壇

公開シンポジウム等（2023年1-3月分）

- ▶3/26 公開シンポジウム「コロナ禍で顕在化した危機・リスクと社会保障・社会福祉～誰一人取り残さない制度・支援への改革～」（社会学委員会社会福祉学分科会）

第二部活動報告

令和4（2022）年12月～令和5（2023）年3月

第二部役員

部長：武田 洋幸
副部長：丹下 健
幹事：尾崎 紀夫
幹事：神田 玲子

組織及び活動の概要

第二部は現会員70名、下記の9委員会※1のもとに91分科会+2小委員会が設けられており、各分野に特徴ある活発な活動を展開している。部会は総会時に開催され、役員会は幹事会の開催日に合わせて行われており、部の運営方針を決定している。

分野別委員会	委員長	分科会数
部附置分科会	※2	3（+小委員会1）
基礎生物学委員会	小林 武彦	15
統合生物学委員会	北島 薫	7
農学委員会	仁科 弘重	14
食料科学委員会	熊谷 日登美	9
基礎医学委員会	松田 道行	11
臨床医学委員会	名越 澄子	14（+小委員会1）
健康・生活科学委員会	小松 浩子	8
歯学委員会	市川 哲雄	3
薬学委員会	山崎 真巳	7

※1 環境学委員会は分野別委員会ではあるが、融合領域分野として第一部～第三部の会員から構成されているため、9委員会には含めていない。

※2 第二部が直接統括する分野別委員会合同分科会として以下を設置。

○第二部生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会（委員長：熊谷 日登美）（前期からの継続）

○第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会（委員長：秋葉 澄伯）（前期からの継続）

○着床前診断、特にPGT-MIに関する検討分科会（委員長：藤井 知行）（第322回幹事会承認 令和4年2月24日）

第二部会、第二部拡大役員会の開催

◇第二部部会：第7回（令和4年12月8日）

議題等：学術会議の在り方について、次期会員・連携会員の選考について、委員会等活動報告等

第二部が直接統括する分科会 #1

◆ 第二部生命科学ジェンダー・ダイバーシティ分科会

- 設置目的：生命科学分野の大学・研究機関・学協会におけるジェンダー・ダイバーシティに関わる現状を把握し、女性研究者、障害を持った研究者や外国人の研究者が活躍できるようにするにはどうすれば良いかについて検討を行う。

- 審議事項：

1. 生命科学分野の大学・研究機関・学協会における女性活躍推進のための方策の検討
2. 生命科学分野におけるダイバーシティ推進に向けた方策に係る審議に関すること

委員長：熊谷 日登美（第二部会員）

- 令和5年3月20日に第7回分科会を開催

連続公開シンポジウム「生命科学分野におけるジェンダー・ダイバーシティ」の内容を取りまとめ、その記録を作成、公表した。また、学協会における男女共同参画のあり方に関する検討小委員会において、自然科学系の協力学術団体（約1350団体）の男女共同参画の実態について調査結果を作成中。

第二部が直接統括する分科会 #2

◆ 第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会

- 設置目的: 大規模感染症等を予防・制圧するために必要な体制の整備等についての現実的な提言に向けた検討を行う
- 審議事項: 国民の健康・福祉の脅威となりうる感染症に関して以下の検討を行う
 1. 過去および将来の感染症流行による公衆衛生上の危機の検討
 2. 感染症流行予防に必要な組織とその連携
 3. 国民の健康・福祉の脅威となりうる感染症流行に迅速・適切に対応するために必要な組織との連携
 4. 感染症を制圧するために必要な組織とその連携
 5. 感染症予防・制圧体制に必要な国際連携と協働
 6. その他、第二部幹事会が必要と考える感染症流行に関する事項に係る審議に関すること

委員長: 秋葉 澄伯(連携会員)

- これまでに22回の分科会を開催
(令和4年12/27、令和5年1/31、3/7)

新型コロナウイルス感染症対策の現場で活動されている方々等に講演していただき、議論を進めている。
意思の表出に向けて準備を進めている。

第二部が直接統括する分科会 #3

◆ 着床前診断、特にPGT-Mに関する検討分科会

- 設置目的: 着床前診断-Preimplantation Genetic Testing(PGT)、特にPreimplantation Genetic Testing for Monogenic(PGT-M:重篤な遺伝性疾患を対象とした検査)は、遺伝性疾患を有する当事者とその家族の想いを尊重すべきだという意見がある一方、遺伝子による選別、産み分けなど優生思想、差別にも繋がり得るとの観点から慎重な実施を望む意見も根強いが、現在その規制は日本産婦人科学会の「見解」による自主規制のみである。技術的進歩により比較的簡便に実施することが可能な状況になっており、またPGT-Mに対する社会の考え方も変化している中で、規制の実効性を担保する国の指針等による方向性の明確化を強く求める指摘もある。上記の状況を踏まえ、この問題について、日本学術会議において、臨床、生命倫理、法学、情報管理を含む委員会を組織し、医学会連合や関連する学協会など関係機関との連携の上で審議を進めたい。すなわち、諸外国における規制動向や議論を踏まえつつ、わが国においてさらに実効性を担保する規制を行うことの要否やその際の課題などについて検討を行う。
- 審議事項:
 1. PGT-M実施に対し、国による規制を加えることの要否
 2. PGT-M実施に何らかの規制を加えるとした場合、規制の作成および運用を、どのような方法で行うのが、もっとも実効性があり、かつ妥当であるのか。

委員長: 藤井 知行(第二部会員)

- 令和5年1月26日に第5回、3月6日に第6回分科会を開催
- 意思の表出に向けて準備を進めている。

関連学協会との連携

- 学術会議幹事会は、記者会見を毎月開催して社会に対して情報発信するとともに、会員・連携会員や協力学術研究団体に記者会見内容をメール配信してきた。第二部では、学協会連合体に対して記者会見内容の通知を行ってきた。

第二部が連携している学協会連合

生物科学学会連合、脳科学関連学会連合、一般社団法人日本農学会、公益財団法人農学会、日本医学会連合、全国公衆衛生関連学協会連絡協議会、一般社団法人日本歯科医学会連合、日本薬学会、水産・海洋科学研究連絡協議会

シンポジウム等（開催済） #1 （令和4年12月～令和5年3月）

第二部においては、令和4年12月から令和5年3月の期間中、13件の公開シンポジウム等を開催した。

開催日	名称	開催場所	委員会・分科会
令和4年 12月2日(金)	公開シンポジウム「品質保証と創薬研究」	パシフィコ横浜	薬学委員会医療系薬学分科会
12月3日(土)	公開シンポジウム「持続的な食料保障に向けた植物保護の新技术」	オンライン開催	農学委員会植物保護科学分科会
12月4日(日)	公開シンポジウム「地元創成看護学の実装－教育・研究・社会貢献の循環」	広島国際会議場第2会場、「第42回日本看護科学学会学術集会HP」にてライブ配信	健康・生活科学委員会看護学分科会
12月10日(土)	市民公開講座「人生100年時代に向けた栄養学からの提案：フレイル予防と腸内細菌への注目」	東京国際フォーラム	食料科学委員会・農学委員会・健康生活科学委員会合同 IUNS分科会
12月10日(土)	市民公開講座「未来の農業」	京都大学時計台百周年記念館 百周年記念ホール(ハイブリッド開催)	日本学術会議
12月11日(日)	公開シンポジウム「持続的な畜産経営を目指したスマート技術と今後の展望」	オンライン開催	食料科学委員会畜産学分科会
令和5年 1月13日(金)	公開シンポジウム「新興・再興感染症の克服に挑む～COVID-19との闘いを経て～」	日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)	薬学委員会生物系薬学分科会
1月22日(日)	公開シンポジウム「薬剤師のプロフェッショナルリズムを考える」	Web開催	薬学委員会地域共生社会における薬剤師職能分科会、薬学委員会
2月24日(金)	公開シンポジウム「子育て支援の継続性を高めるために－新たな視点の提案－」	日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)	健康・生活科学委員会家政学分科会

シンポジウム等(開催済) #2 (令和4年12月～令和5年3月)

開催日	名称	開催場所	委員会・分科会
3月11日(土)	学術フォーラム「食料システムから地球温暖化の抑制を考える」	日本学術会議講堂	日本学術会議
3月11日(土)	市民公開講座「100年後の人類は？」	京都大学 時計台記念館 百周年記念ホール +オンライン配信	基礎医学委員会 機能医科学分科会、 同IUPS分科会
3月15日(水)	公開シンポジウム「農芸化学分野における『視る・創る』イノベーションの新潮流」	オンライン開催	食料科学委員会・農学委員会合同農芸化学分科会
3月18日(土)	公開シンポジウム第3回「With/After コロナ時代におけるケアの課題と新たな取り組み～医療・ケア、倫理、政策の捉え直しと提案～」	オンライン及びYouTube配信	健康・生活科学委員会・臨床医学委員会 合同少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会、臨床医学委員会老化分科会、 健康・生活科学委員会看護学分科会

第三部報告

令和4年12月～令和5年3月

第三部部会 12/8(前回総会中)

第三部拡大役員会 *1/26, 2/22, *3/23

* 分野別委員会委員長も参加

部長	吉村 忍
副部長	米田 雅子
幹事	沖 大幹
幹事	北川 尚美

1. 第三部における分野別委員会

	委員長	副委員長
環境学委員会 *	浅見 真理	池邊 このみ
数理科学委員会	小澤 徹	齋藤 政彦
物理学委員会	野尻 美保子	腰原 伸也
地球惑星科学委員会	田近 英一	佐竹 健治
情報学委員会	相澤 清晴	谷口 倫一郎
化学委員会	茶谷 直人	北川 尚美
総合工学委員会	小山田 耕二	玉田 薫
機械工学委員会	大島 まり	光石 衛
電気電子工学委員会	中野 義昭	中川 聡子
土木工学・建築学委員会	小林 潔司	田辺 新一
材料工学委員会	山口 周	乾 晴行

* 第一部～第三部合同

11分野別委員会のもとに80分科会が設置され活動

1. 第三部の附置分科会

理工学ジェンダー・ダイバーシティ分科会

委員長 野尻 美保子

副委員長 伊藤 貴之

参考 第25期の第三部も深く関わる課題別委員会

「[防災減災](#)学術連携委員会」

「[自動運転](#)の社会実装と次世代モビリティによる社会デザイン検討委員会」

「[オープンサイエンス](#)を推進するデータ基盤とその利活用に関する検討委員会」

「[学術情報のデジタルトランスフォーメーション](#)を推進する学術情報の基盤形成に関する検討委員会」

「[フューチャー・アース](#)の推進と連携に関する委員会」

「我が国の学術の発展・[研究力強化](#)に関する検討委員会」

1. 第三部の附置分科会

参考 第25期の第三部も深く関わる委員会等連絡会議

「[カーボンニュートラル\(ネットゼロ\)](#)に関する連絡会議」

「[パンデミックと社会](#)に関する連絡会議」

「持続可能な発展のための[国際基礎科学年2022 \(IYBSSD2022\)](#) 連絡会議」

2. 令和4年12月～令和5年3月の活動

(1) 第三部会での議論(12/8)

- 次回夏季部会
中部地区に所属する西先生に場所と時期の検討依頼
- 意思の表出
検討課題等の提出期限、複数の親委員会が関係する場合等について意見交換
- 未来の学術振興構想
提案の締切日と今後の進め方について確認

(2) 拡大役員会での議論(*1/26, 2/22, *3/23

* 分野別委員会委員長も参加)

- 「日本学術会議の在り方についての方針」について意見交換
- 第三部夏季部会の企画等について意見交換
- 第三部内の予算執行について状況を確認した上で、適正に執行
- 理学・工学系学協会連絡協議会の議題について検討
- その他

3. 学術フォーラム開催

「**食料システムから地球温暖化の抑制を考える**」(R5.3.11)
カーボンニュートラル(ネットゼロ)に関する連絡会議
【ハイブリッド開催(日本学術会議講堂、オンライン)】

4. 公開シンポジウム開催

「第12回計算力学シンポジウム」(R4.12.5)

総合工学委員会・機械工学委員会合同計算科学シミュレーションと工学設計分科会【オンライン開催】

「物理学におけるジェンダーギャップの現状と対策・物理教育の役割」(R5.1.11)

物理学委員会、物理教育研究分科会
【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「持続可能な社会の創り手を育てる学び～SDGsの達成に資するカリキュラムの開発に向けて～」(R5.1.21)

フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会【オンライン開催】

「感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方ー機能分化社会から機能混在社会へー」(R5.1.22)

土木工学・建築学委員会感染症拡大に学ぶ建築・地域・都市のあり方分科会【オンライン開催】

「情報学シンポジウムー量子コンピューティングの展開ー」(R5.1.23)

情報学委員会【オンライン開催】

4. 公開シンポジウム開催

「原子力総合シンポジウム2022～新たな社会状況に貢献する原子力技術の期待と課題」(R5.1.26)

総合工学委員会原子力安全に関する分科会
【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「デザインの概念とその広がりー社会的理解をめざして」(R5.2.4)

土木工学・建築学委員会都市・地域デザインの多様なアプローチ分科会
【オンライン開催】

「数理・データサイエンス・AI時代における統計科学の教育及び研究について」(R5.2.17)

数理科学委員会数理統計学分科会、数学教育分科会、数学分科会
【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

「水害対策と建築分野の取組み」(R5.3.8)

土木工学・建築学委員会気候変動と国土分科会【オンライン開催】

「第8回理論応用力学シンポジウムー力学の深化に向けてー」(R5.3.10)

機械工学委員会・総合工学委員会・土木工学・建築学委員会合同理論応用力学分科会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

4. 公開シンポジウム開催

「数理科学の展望 国際的展開と諸科学・産業との連携拡大を探る」(R5.3.14)
数理科学委員会数学分科会、IMU分科会【日本学術会議講堂】

「GX: グリーントランスフォーメーションに挑む応用物理ー持続可能な未来社会に向けてー」(R5.3.15)

総合工学委員会未来社会と応用物理分科会
【上智大学四谷キャンパス(ハイブリッド開催)】

「これからの半導体産業を牽引する人材育成と産学連携」(R5.3.17)

電気電子工学委員会デバイス・電子機器工学分科会
【上智大学四谷キャンパス(ハイブリッド開催)】

「計算音響学の目指すもの」(R5.3.27)

総合工学委員会・機械工学委員会合同計算科学シミュレーションと工学設計分科会【日本学術会議講堂(ハイブリッド開催)】

5. 理学・工学系学協会連絡協議会

令和5年3月23日 9:30～11:30 WEB開催

- 内閣府「日本学術会議の在り方についての方針」について説明及び意見交換
- 日本学術会議と学協会の連携等について意見交換

理学・工学系学協会連絡協議会(82学協会)
日本学術会議第三部役員会のもとに、理学・工学系の学協会との連携を強め、双方の活動をさらに発展させるために、科学・技術、学協会、日本学術会議等に関わる課題について意見交換する場として設置。多くの学協会に共通する課題(新公益法人制度、学術論文誌の出版、若手・人材育成、財政等)、科学・技術全般に跨る課題、学協会から日本学術会議への意見・要望等について、情報交換・意見交換を行ってきた。

- 第1回 平成22年4月23日(金) 13:30～15:30
- 第2回 平成23年7月29日(金) 13:30～15:30
- 第3回 平成24年5月18日(金) 14:00～16:00
- 第4回 平成25年2月22日(金) 10:00～12:00
- 第5回 平成26年6月25日(水) 13:30～15:00
- 第6回 平成28年6月24日(金) 10:00～12:00
- 第7回 平成29年8月31日(木) 10:00～12:00
- 第8回 平成30年3月30日(金) 10:00～12:00
- 第9回 平成31年3月28日(木) 10:00～12:00
- 第10回 令和2年8月26日(水) 10:00～12:00
- 第11回 令和2年10月30日(金) 13:00～15:20
- 第12回 令和3年6月24日(木) 10:00～12:00
- 第13回 令和4年3月24日(木) 10:00～12:00
- 第14回 令和5年3月23日(木) 9:30～11:30

第25期日本学術会議 若手アカデミー活動報告 (2022.10-2023.3)



第25期若手アカデミー

日本学術会議若手アカデミー (Young Academy of Japan) は、人文・社会科学と自然科学にまたがる多様な分野にわたる、45歳未満の研究者をメンバーとしています。

第25期全体委員数：50名
(うち特任連携会員：7名)

全体会議 2021年11月30日、12月10日、2022年9月6日
運営分科会 2021年12月16日、2021年1月21日、2月22日、
9月1日 3月23日 2022年11月28日

8つの分科会 (具体的な活動を担う)

学術の未来を担う人材育成分科会	(12名)
学術界の業界体質改善分科会	(5名)
越境する若手科学者分科会	(19名)
国際分科会	(11名)
地域活性化に向けた社会連携分科会	(14名)
イノベーションに向けた社会連携分科会	(12名)
情報発信分科会	(11名)
GYA 総会国内組織分科会	(14名)

*GYA総会後に分科会も終了



全体会議スクリーンショット

第25期若手アカデミー運営分科会メンバー

幹事団



代表
岩崎 渉



副代表
安田仁奈



幹事
小野 悠



幹事
松中 学

各分科会 委員長



国際分科会
入江直樹



GYA 総会
国内組織分科会
新福洋子



学術界の業界体質
改善分科会
川口慎介



地域活性化に向けた
社会連携分科会
加藤千尋



学術の未来を担う
人材育成分科会
平田佐智子



越境する若手科学者
分科会
石川麻乃



情報発信分科会
高田知実



イノベーションに向けた
社会連携分科会
高瀬堅吉

若手アカデミー分科会活動状況 (1/2)

分科会名	活動目的・内容	状況
地域活性化に向けた社会連携分科会	現在国内外の社会経済状況が大きく変化する中、科学と地域社会との関係性が問い直されている。社会課題の解決に科学の知識や手法が有効であるだけでなく、科学する場としての地域社会、科学への市民の参加が見直されている。地域社会における科学者の役割を幅広く検討し、多様な主体との対話を重ねることで、科学と地域社会の持続的な関係性を再定義し、実現方策を検討する。	第1回 R3 1月19日 R3 3月1日公開ワークショップ「若手科学者が拓く地域と科学の関係」 第2回 R3 6月2日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 3月25日 第5回 R4 8月23日 第6回 R4 12月15日
学術界の業界体質改善分科会	研究従事時間の減少とそれ以外の業務の増加が指摘されるなか、研究に集中できる環境整備と健全なライフ・ワーク・バランスの確立は、重要な課題である。学会活動にかかる時間的負担やその他の慣例的な業務負担など、学術界の様々な「業界体質」を可視化し、その改善に向けた調査・議論を進める。	第1回 R3 2月12日 第2回 R3 11月22日 第3回 R4 9月20日 第4回 R5 (3月予定)
イノベーションに向けた社会連携分科会	第25期若手アカデミービジョン・ミッションを共有し、「イノベーション」の概念整理に着手している。現時点で優先すべきイノベーション、イノベーションを起こすために必要なもの、イノベーションを阻むものについて議論する。今後、シンポジウムをし、広く市民との意見交換の場を持つとともに、関係団体と意見交換を行い、議論の内容を意思の表出へとつなげる。	第1回 R3 2月22日 第2回 R3 4月16日 第3回 R3 11月16日 第4回 R3 12月10日 第5回 R4 1月18日 第6回 R4 3月23日 第7回 R4 5月30日 第8回 R4 12月15日
情報発信分科会	若手アカデミーの活動を促進し、その有効性を高めるために、情報発信の媒体や方法を議論し、実践する。国内のアカデミアとその周辺に限定せず幅広い利害関係者をステークホルダーと捉え、若手アカデミーに関する理解や認識を得ながら対話し、双方向的なコミュニケーション活動を目指す。	第1回 R3 4月15日 第2回 R3 7月12日 第3回 R3 12月10日 第4回 R5 2月10日

若手アカデミー分科会活動状況 (2/2)

分科会名	活動目的・内容	状況
学術の未来を担う人材育成分科会	大学院において専門教育を受けた多様な人材を活かすべく、高等教育が担う教養教育・専門教育の社会的価値を多角的に評価するための調査・議論を進める。また、大学院生が効果的な教育を受け研究に専心できる環境を構築するための調査・議論や精神的・経済的な環境に対して支援する枠組みのあり方について検討をおこなう。	第1回 R3 2月17日 第2回 R3 11月22日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 11月22日
越境する若手科学者分科会	幅広い専門分野を持つ若手科学者間の研究交流を図り、既存の発想にとられない科学分野間の融合によって革新的な研究展開が生じうる新規領域やそれらが生む未来社会のビジョンの提案、新しいテクノロジー等を用いた市民との交流の実践を行う。	第1回 R3 2月26日 研究交流会5回 第2回 R3 5月18日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 10月26日 第5回 R5 3月6日
GYA 総会国内組織分科会	国際的若手学術組織であるグローバルヤングアカデミー(GYA)と共に、科学技術の未来や世界規模の社会課題の解決を考えるGYA総会兼学会を日本ででする。GYA共同代表、執行役員およびメンバーで構成される企画組織委員会と連携し、企画内容および登壇者の提案や国内的な準備を行い、かつ若手アカデミー以外の若手研究者や若手以外の研究者、行政官、産業界、一般市民も参加できる議論の場を設定できるよう連絡調整を行う。	第1回 R3 1月21日 第2回 R3 3月12日 第3回 R3 6月17日 第4回 R3 10月8日 第5回 R4 1月5日 第6回 R4 6月1日 第7回 R4 8月25日
国際分科会	世界における日本の学術の役割や、世界におけるわが国の学術をどのように進めていくべきかについて、若手科学者の立場から考える。既に関係の深い国際的若手学術組織であるGYAへの参画を通じ、他国の若手アカデミーとの交流を深め、また我が国との交流連携を深めるとともに、他国のアカデミーと共同して国際的発信を行う。	第1回 R3 2月15日 第2回 R3 3月24日 第3回 R3 12月10日 第4回 R4 12月28日

若手アカデミー活動報告 広報活動

農林水産省との連携によるYouTube発信



日本学術会議HPにもシリーズのリンクを掲載！



若手アカデミーと農水コラボ動画の視聴回数5.7万回以上

若手アカデミー活動報告

ライフワークバランス樹立に向けた取り組み

- 令和4年8月5日に日本学術会議が発出した『回答 研究力強化-特に大学等における研究環境改善の視点から-に関する審議について』にかかる審議において若手視点の情報収集や見解の取りまとめで協働した。



成事業」なども特定の大学・研究機関の一部の研究者が恩恵に預かっているにすぎない。その結果、一部の早熟な若手研究者が手厚い支援を重複して受給する一方、多くの若手研究者が置き去りにされている現状がある。特に任期付研究職に採用された若手研究者は比較的短期間で成果を上げる必要があるため、スタートアップ支援の遅れが大きなマイナス要因となりかねない。かつてない速度で縮小を始めた我が国の研究者人口を下支えするため、政府と大学・研究機関はスタートアップ支援の対象を「優れた若手研究者」ではなく、「新たに研究に参入する研究者全て」と再定義し、「芽を育む」精神をもってタイムリーな支援を実施する必要がある。

また、別の社会情勢の変化による影響の事例として、国際的なポストドク給与水準の差によって生じている課題が挙げられる。近年、JSPS 海外特別研究員制度の支給金額が、渡航先の国や大学・研究機関が設定する最低賃金水準を下回っているために渡航許可が得られない障害が発生している。具体的には、欧州原子核研究機構 (CERN、ジュネーブ)、マサチューセッツ工科大学 (MIT、マサチューセッツ)、スタンフォード (Stanford) 大学 (カリフォルニア) への渡航計画などである[24]。アメリカ国立衛生研究所 (NIH) の公表しているポストドク給与水準は、最低ランクであっても年間 54,840 米ドルに設定されている[25]のに対し、JSPS 海外特別研究員事業での滞在費・研究活動費は最大でも年間約 620 万円である[26]。国家間の賃金水準の差や為替相場などの社会情勢によって引き起こされる

越境する若手研究者分科会 活動報告

○水都市環境工学グループにおいて越境研究の試み

研究概要

柏の葉の調整池 1～3号 (アクアテラス含む) について、空間形態、水の滞留時間、生物相、社会機能、整備・維持コストなどの観点から定量的に比較評価する。各調整池の健康状態や機能を多面的に明らかにすることで、都市における調整池のあり方について検討・提案する。
また、調整池の多面的評価手法を開発する。

UDCK (柏の葉アーバンデザインセンター) と
打ち合わせをしたり、柏市の担当の方を交えて現地視察



「若手研究者をとりまく評価に関する意識調査」

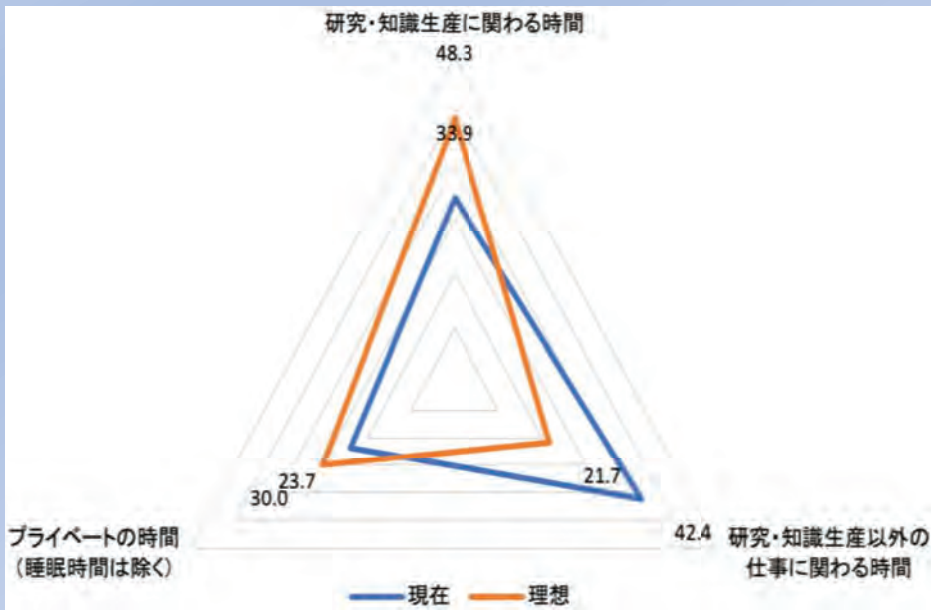
調査期間	2022年6月7日～7月5日
調査対象	45歳未満の若手研究者（大学院生や若手の専門職を含む）
調査票	https://www.sci.go.jp/ja/sci/wakate/pdf25/chosa2206-07.pdf
調査方法	Webアンケート（楽天インサイトに回答サイト構築とデータ収集を委託） ※回答者は若手研究者当事者であり、Webアンケートである性格上、キャリアパスなどに関して相対的に関心の高い層である可能性が高いことに留意
周知方法	日本学術会議と文部科学省からの依頼により、学協会や大学を通じてURLを配布
有効回答数	7849名（全回答数8629名から調査対象外の者を除いた）
資金助成	公益財団法人日本学術協力財団原田弘二基金

世界的な競争、評価をめぐる問題、キャリアパスに関する課題など、若手研究者をめぐる研究・知識生産の環境は多くの課題を抱えている。特に日本では基盤的経費から競争的資金への移行により評価の問題が顕在化している。本調査は、若手研究者にとっての評価をめぐる現状認識と理想像の乖離について分析することで、知識生産をめぐるより良いエコシステムの形成に寄与することを目的とした。

■7849人の回答者の基本属性

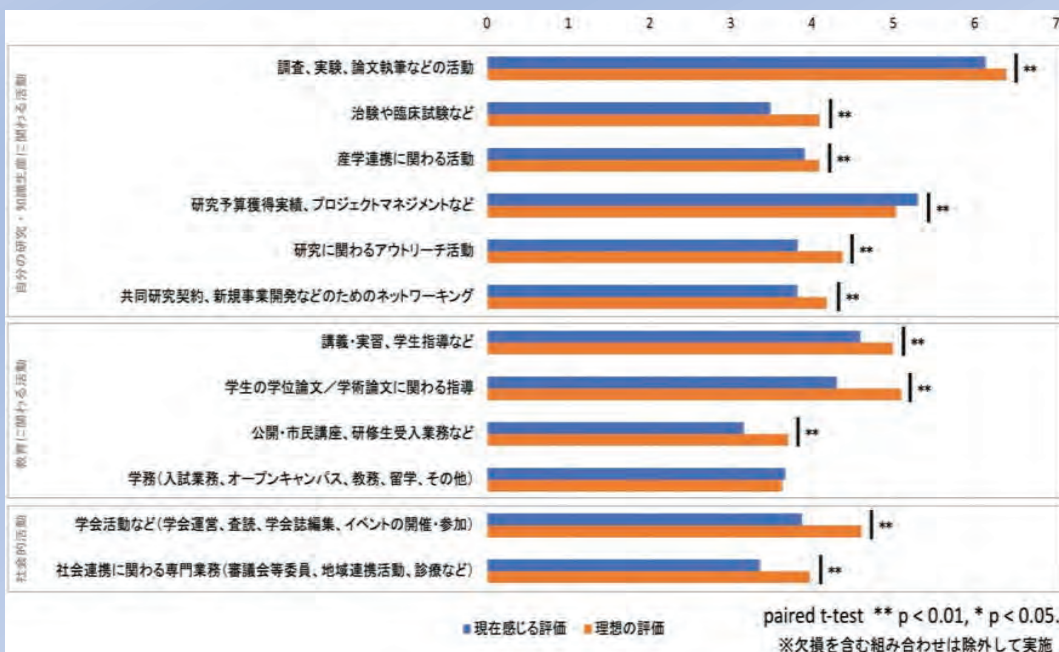
- 年齢：20代前半から40代前半まで幅広い年齢層
- ポジション：「准教授」と「講師・助教」が合わせて60%程度。その他、大学院生（修士課程・博士課程）や博士研究員、助手、非常勤講師、技術職員など
- 任期の有無：「任期なし」が55%を占め、残りが「任期あり」
- 博士号の取得状況：「博士号取得から5年以上経過」が45%、「博士号取得から5年未満」が23%、「取得していない」が32%
- 専門分野：人文・社会科学から自然科学まで幅広い専門分野
- 職務内容：「教育と研究の両方に従事している」がもっとも多く52%、続いて「基本的に研究メインに従事している」が32%。教育や管理・運営、特定の専門業務をメインに従事している割合は少ない
- 性別：「男性」が72%、「女性」が27%
- 問題関心の高い評価：「就職における評価」、「昇進における評価」、「テニュアトラック審査」、「論文に対するピアレビュー」、「科研費など研究費採択に関わる審査」、「同じ分野の研究者からの評判」など幅広い関心
- 所属：国内の大学・研究機関の所属が97%
- 子どもの有無：「子どもがいる」は41%
- 介護の有無：「介護をしている」は3%

現実と理想 時間配分



- 現在、「研究・知識生産以外の仕事に関する時間」が最も多く42%を占め、続いて「研究・知識生産に関する時間」が34%、「プライベートの時間」が24%である
- 理想では「研究・知識生産以外の仕事に関する時間」を現在の半分にして、その分を「研究・知識生産に関する時間」や「プライベートの時間」に振り分けたいと感じている
- 以上の傾向はどの分野も共通
- 「研究・知識生産以外の仕事に関する時間」は全体の2割程度であれば許容できる、という解釈も可能である
→「研究・知識生産以外の仕事に関する時間」を全体の2割程度にまでに抑えることが目安となりうる
- 「研究・知識生産以外の仕事に関する時間」には、教育、学務、実務など様々な要素が含まれ、分野によっても異なる
→分野や大学の違いによる業務ポートフォリオや性格の違いを考慮する必要

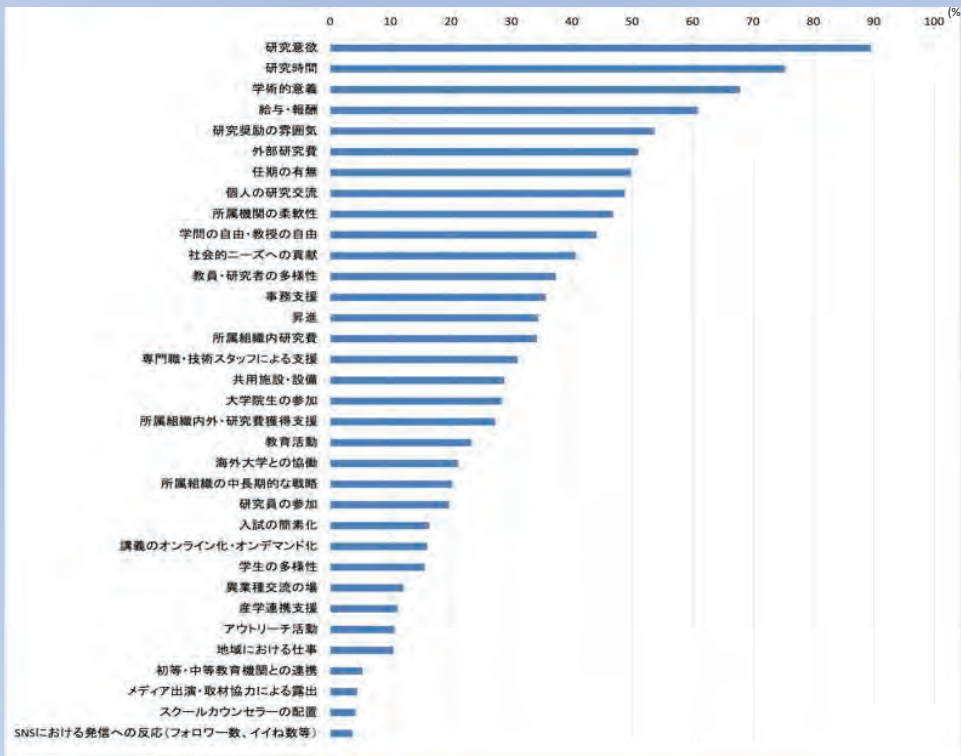
■現在受けていると感じている評価と理想



「学生の学位論文／学術論文に関する指導」、「学会活動など」、「社会連携に関する専門業務」では、現在<理想の差がとくに大きい。もっと評価してほしい、評価されるべき、と感じている可能性がある
→分野や大学の違いによる業務ポートフォリオや性格の違いを考慮する必要

「研究予算獲得実績、プロジェクトマネジメントなど」についてのみ、現在>理想となっており、過剰に評価されていると感じている
→予算獲得競争が過剰ではないか、という若手研究者の懸念を示唆

■ 知識生産活動に関連して重要だと思う環境要因

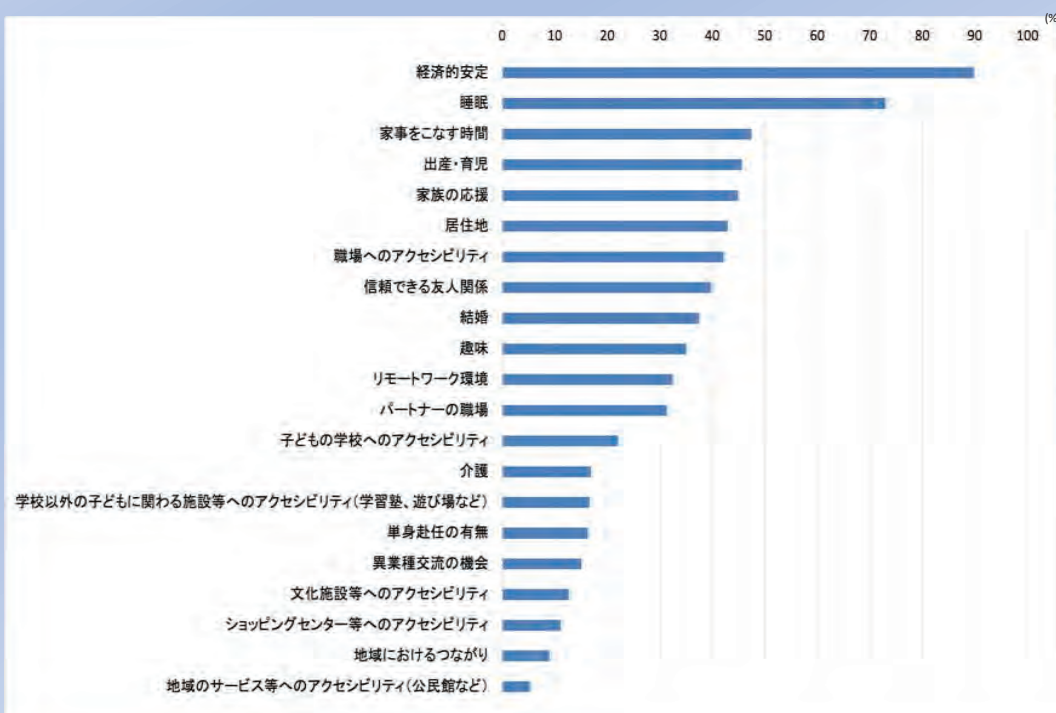


「研究意欲」や「学術的な意義」、「研究奨励の雰囲気」などモチベーションに関わる項目や「研究時間」が研究・知識生産活動に影響を与える重要な要因として認識されている。

「給与・報酬」や「任期の有無」など職業としての安定性に関わる項目が続く

いずれの年代や職階でも同様の傾向を示している

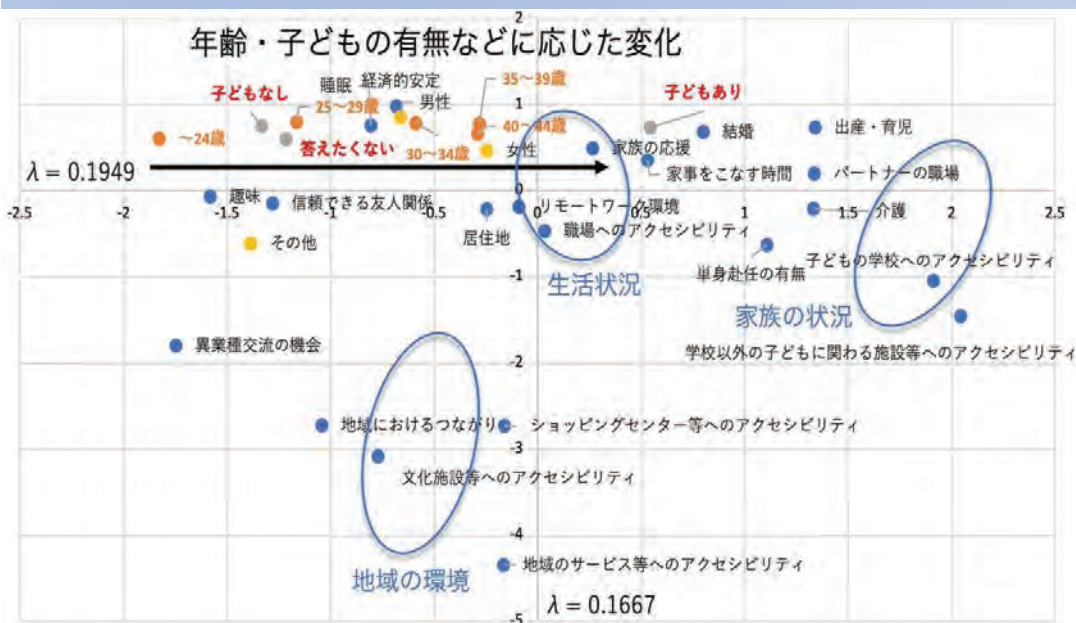
■ 知識生産活動に関連して重要だと思う生活要因



「経済的安定」と「睡眠」が、研究・知識生産活動に影響を与える重要な生活要因として認識されている

「家事をこなす時間」、「出産・育児」、「家族の応援」など家族や生活に関わる項目、「居住地」や「職場へのアクセシビリティ」など住む場所・働く場所に関する項目が続く

どのような生活要因と一緒に選択されやすいのかを見るために、数量化Ⅲ類分析による回答パターン分類の結果



「生活状況」、「家族の状況」、「地域の環境」に関する項目がそれぞれ一緒に選択されやすく、年齢が上がるに連れて、研究・知識生産に関して注目する生活要因が「個人の状況」から「家族の状況」に変化

子どものいる人は子どものいない人に比べて、「個人の状況」より「家族の状況」を選択する傾向がある

→年齢や家族の変化によって、子どもや家庭への関心が高くなり、知識生産活動と切り離して考えることができなくなる

→ライフプランとキャリアパスの変化が連動している

→ライフプランとキャリアパスに応じた
 当たり前の支援の重要性

男性よりも女性の方が相対的に「家族の状況」を選択する傾向が見受けられる
 →女性研究者が置かれている状況を考慮する必要

若手アカデミー活動報告-国際関連

世界科学フォーラム 2022年12月8日 南アフリカ ケープタウン

THEMATIC SESSION III/A ECOSYSTEM TO ENHANCE GLOBAL PUBLIC GOOD WITH SCIENCE: DISTRIBUTIVE JUSTICE AND WELL-BEING AS KEY CONCEPTS

標葉会員、近藤会員らが、日本学術会議、JSTと共催で、科学政策に関する主要な国際議論の場となっている世界科学フォーラム (WSF) においてテーマ別セッションを共催し、科学とグローバルな公益の関係について議論を深めた

若手アカデミー活動報告-国際関係

・2023年 G7サイエンス学術会議

2023年に日本が議長国となるG7サイエンス学術会議にむけ、3つのテーマ（気候変動について森章会員、高齢化社会について山田会員、海洋と生物多様性について安田会員）それぞれに1名ずつ若手アカデミーから執筆メンバーが選出され、共同声明文の作成を行いパネルディスカッションなどに参加した。

また3月8日の会議において岩崎代表が若手アカデミーの取りまとめた見解を紹介し、カナダなどからも是非自国で紹介してほしいという話が出た。



第25期若手アカデミー ビジョン・ミッション

20年後の科学・学術と社会を見据えたリモデリング戦略を考える

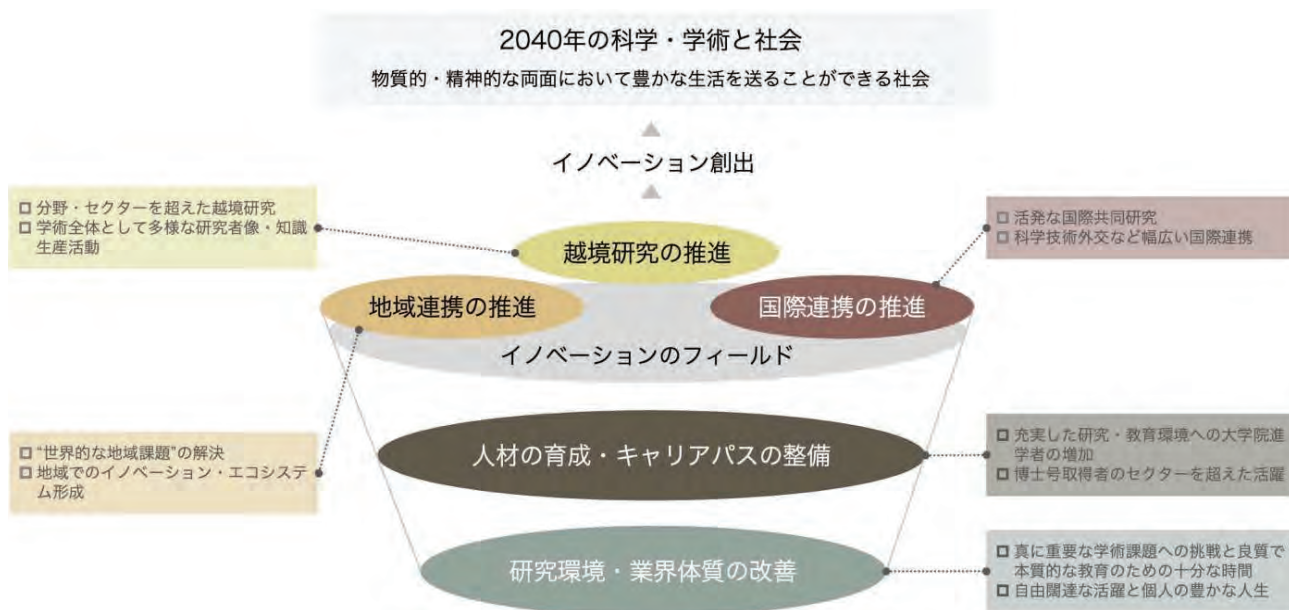
- 研究者コミュニティのみならず政府・産業界・メディア・国民や諸外国の若手アカデミーとも対話・連携することで、世界や日本が直面する諸問題、また、若手研究者をとりまく諸問題に関する解決策を提示し、実行していく
- 多様な観点から分科会活動を行うとともに、幅広い専門性からの知見を集約することで、20年後の科学・学術と社会を見据えた「リモデリング戦略」を提示する

25期の中に各分科会からの意見をまとめた意思の表出

「2040年の科学・学術と社会を見据えて取り組むべき課題～人材、業界、越境、国際、地域、革新～」



イノベーションのフィールドとしての越境研究・地域連携・国際連携 を支える上で 必要な人材育成・キャリアパス整備・研究環境改善 (若手アカデミーで作成)



2040年の科学・学術と社会を見据え、イノベーションを我が国から創出するために、いま取り組むべき10の課題

(1) 基盤的・伝統的分野における知識や技術の蓄積

基盤的・伝統的分野における知識と技術の蓄積こそが我が国の学術研究の根底をなす豊かな土壌であり、その維持と発展が決定的に重要である。

(2) 越境研究や地域連携に対する評価や支援の拡充

学際的な越境研究や、地域課題を解決するための学術活動を長期的な時間スケールでの確に評価するシステムの確立や、ポストや予算のさらなる措置が急務である。

(3) 博士号取得者を擁するコアファシリティの拡充

業務過多の中でも多様な人材が活躍し、重要な研究課題に集中するために、諸外国と同様に高度な技術者を擁するコアファシリティの拡充が急務である。

(4) セクターを超えた共創プラットフォームの整備

アカデミアが産業界・行政・地域社会と連携し、重要な領域横断的課題を力を合わせて解決するとともに、連携できる人材を育成する共創の場の整備が急務である。

(5) 競争的資金を活用するための基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強

基盤的な経費や人材の不足により競争的資金を十分に活用できていない本末転倒な状況を改善するために、基盤的経費の拡充と研究支援人材の増強が急務である。

2040年の科学・学術と社会を見据え、イノベーションを我が国から創出するために、いま取り組むべき10の課題（続き）

(6) 科学技術外交に関わるキャリアパスの整備

科学・学術分野における我が国の国際連携力を根本から強化する人材として、科学技術外交を担うことが出来る人材の育成とそのキャリアパスの整備が急務である。

(7) 過度な経営的視点や失敗を許さない前例踏襲主義からの脱却

0から1を創り出すイノベーションを支えるため、経営的な視点に依存しすぎた研究費などのリソース配分を改め、失敗を許容する予算配分や運営を行うことが急務である。

(8) 教育費の家計負担の低減

大学院生の減少を食い止め、イノベーション人材を供給していくための最も効果的なアプローチとして、教育費の家庭負担をさらに減らすことが急務である。

(9) アカデミア自身の“業界体質”の改善

ハードワークを美德とする業界体質を改善し、形式に囚われず本質を精査して、無駄なコストや自己目的化した活動をアカデミア自らが効率化していくことが急務である。

(10) 博士号取得者のセクターを越えた活用とジョブ型雇用の推進

多様なセクターでの高度専門人材の活用を推進し、雇用の流動性を高めること、そのためのジョブ型雇用の推進が急務である。

2040年の科学・学術と社会を見据えて取り組むべき課題～人材、業界、越境、国際、地域、革新～

